

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第900号 平成27年3月20日

飛行機よ

劇作家で歌人の寺山修司氏の作品に「飛行機よ」という詩があります。
ご存知の方も多かろうと思いますが、まずはその詩の一部を紹介しましょう。

飛行機よ

翼が鳥をつくったのではない
鳥がつばさをつくったのである

少年は考える
言葉でじぶんの翼をつくることを
だが
大空はあまりにも広く
言葉はあまりにもみすぼらしい

少年は考える
想像力でじぶんの翼をつくることを
いちばん小さな雲に腰かけて
うすよごれた地上を見下ろすと
ため息ばかり

(以下略)

(「寺山修司 全詩歌句」から)

寺山修司という人は、1935年(昭和10年)に生まれ47歳という若さで亡くなっています。また、彼は、冒頭紹介したように劇作家で歌人という以外にも沢山の顔を持っており、劇団「天井桟敷」を主宰する他、演出家、映画監督、小説家、作詞家、脚本家、そして評論家等として活躍し、膨大な文芸作品を残しています。

私は、寺山氏の事は殆ど知りません。というより、敬遠していたといった方が良いでしょう。

寺山氏が劇団「天井桟敷」を立ち上げたのは1967年(昭和42年)の事ですが、その翌年からアングラ演劇ブームが起こり彼の劇団は一世を風靡するのですが、当時20代そこそこだった私は、皆がなびくモノに反発するという悪弊から、寺山

氏にも彼の作品にも背を向けていたのです。

しかし、私は、ある日寺山氏の「全詩歌集」を手にし、そこに搭載されている「飛行機よ」という詩に出会う事になりました。でもその時には、特別の感慨があった訳ではないのに、「翼が鳥をつくったのではない 鳥が翼をつくったのである」「大空はあまりにも広く 言葉はあまりにもみすぼらしい」という言葉が、頭の片隅にずっと静かに残っていたのでしょうか、塾頭通信900号に向けて一文を書こうとした時、その言葉が蘇って来たのです。

大空を、翼を広げ悠然と飛ぶ鳥は翼が作ったものではない。それは当たり前の事ですが、大事な事は、鳥が必要としたから翼を手に入れたという事だろうと思います。

しかし、自分が必要とし、手に入れるために努力しても手に入れる事が出来ないものもある、それが現実でもあります。

寺山少年は、言葉によって広い世界を勇躍飛行しようとしたのだけれども、大空を飛行するための翼をもつには「言葉はあまりにもみすぼらしい」というのです。「言葉の魔術師」ともいわれていた寺山氏に「言葉はあまりにもみすぼらしい」等といわれると、自分の言葉のみすぼらしさを自覚しながらも通信を書き連ねて900号まで来た私としては、誠にいたたまれない心境になってしまいます。

多分、そのいたたまれなさが「飛行機よ」という詩を思い出させた原因かも知れません。

この詩の中で、寺山氏は「墜落ならばできるのだ 翼がなくても墜ちられるから」と書いています。私には、それ程の絶望や、それ程の懊悩を抱えた事はありません。それもまた、私の弱さかも知れないと思っています。それでも、私は通信を書き続けようと思います。何故なら、書くというのは、自分自身を見つめ直す作業でもあるからです。

寺山氏の詩に「目」というのがあります。

その詩の最後のフレーズは、

「目はいつも二つある
一つはお前を見るために
もう一つはぼく自身を見るために」
というものです。

私にとって書くという行為は、私自身の目を通して私の目の前にいる人達を見、そして、自分自身をも内省する作業そのものなのです。

私には翼がありませんので、大空から世界を鳥瞰する事は出来ませんが、これからも、二つの目で見て感じた事を、我が言葉の「みすぼらしさ」にも臆せず書き綴って行こうと、改めて心に誓っているところです。

(塾頭：吉田 洋一)